

# 石川県旧能都町地域の名詞のアクセント

鎌田寧々

nene1184832.kmt@gmail.com

キーワード：能登半島 能都町方言 京阪式アクセント 能登中央式  
名詞アクセント

## 要旨

石川県旧鳳至郡能都町方言は、旧七尾市徳田などに分布する能登主流アクセントの変形したアクセントをもつとされてきた。本稿ではまず、能都町の1～3拍のアクセントを記述する。次に、これを能登主流アクセントと比較し、能都町方言には能登主流アクセントの変形と呼ばれるほどの差はなく、同様の体系をもっていることを指摘する。最後に、上昇式の音調型に注目し、能都町の方言が式の対立を失う過程に入ろうとしていることを示す。特に、1～3拍の名詞の中では1拍のものから対立が消滅していくという可能性を指摘する。

## 1. はじめに—能登半島のアクセント

金田一・芳賀 (1955) によれば能登半島は東京式、京阪式アクセントのほか、一型アクセントも観察することができる地域であり、性格の異なるアクセントが複雑に分布しているという(次節図1参照)。さらにこのうち、京阪式に属するものを、分布の広さなどから能登方言の主流アクセントであると見ている。

本稿では、金田一・芳賀 (1955) で京阪式アクセントとされている地域のうち、現鳳珠郡能登町に属する、旧鳳至郡能都町のアクセントを取り上げ、現地調査をもとに記述する。能都町方言は、山口 (1964) によって、七尾市徳田のものを典型とするような能登主流アクセントの変形であるとされている。能登主流アクセントについては新田 (2005) でも既に報告されており、この能登主流アクセントの音調型との比較を行い、類似点・相違点の背景について考察する。

## 2. 能登主流アクセント

### 2.1. 用語の整理

まず、「能登主流アクセント」、あるいは「能登の主流アクセント」という用語について再検討する。金田一・芳賀 (1955: 184) は、能登半島の方言には

- (a) 京阪式アクセント (式の対立のある多型アクセント)
- (b) 東京式アクセント (式の対立のない多型アクセント)
- (c) 曖昧アクセント<sup>1</sup>・一型アクセント

の大きな3つの流れがあると指摘している。そのうえで、この(a)～(c)の中では、(a)の京阪式アクセントが「分布の広さ・近接地域の方言との比較、その他の点から、能登半島の主流アクセントと呼んでよいものと考えられる」と述べている。したがって、金田一・芳賀(1955)の言う「主流」とは、系統的な意味ではなく、使用される地域が広いという意味であると考ええる。図1に能登半島のアクセント分布図<sup>2</sup>を示す。

また山口幸洋(1964)は、羽咋郡押水町(現宝達志水町)方言のような例を「能登主流アクセント」と認めるのが妥当であるとしている。山口によれば、羽咋郡押水町の他に羽咋市・田鶴浜町・半浦などの地域も、能登主流アクセントをもつ地域であるという。羽咋市・田鶴浜町・半浦は、金田一・芳賀(1955)のアクセント分布図では「京阪式アクセント」と分類されているが、これについては金田一・芳賀(1955)が、1拍名詞の1/2/3<sup>3</sup>の類別体系<sup>4</sup>、2拍名詞の1/2・3/4/5の類別体系をもって「京阪式」としたものと考ええる。類の統合の状況に加え、二つの式を持っているという点で、能登主流アクセントは京都方言のアクセントと類似している。

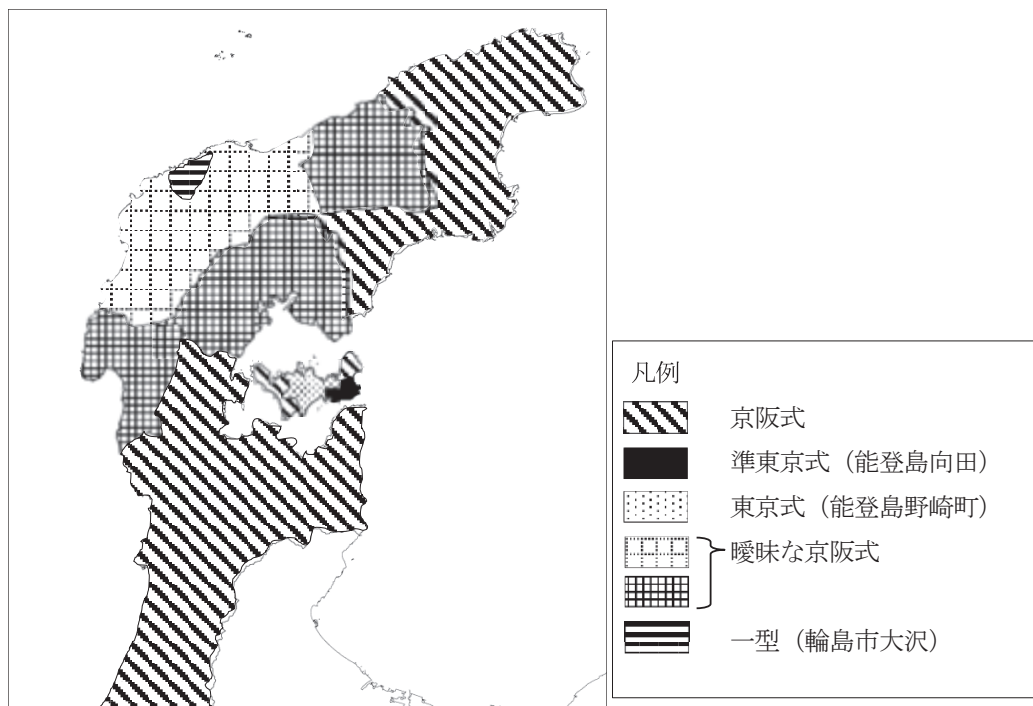
金田一・芳賀(1955)のアクセント分布図と、山口(1964)が指摘する能登主流アクセントの地域を重ね合わせてみると、山口が列挙している地域の方が範囲が狭いことがわかる。特に、金田一・芳賀(1955)が指摘する能登半島の北部の京阪式アクセント地域は、山口(1964)によれば典型的な能登主流アクセントの地域ではなく、能登主流アクセントの変形であるという。

<sup>1</sup> 金田一・芳賀(1955: 186)は型そのものが不安定で、型相互の区別も不明瞭なアクセントのことを曖昧アクセントと呼んでいる。

<sup>2</sup> 金田一・芳賀(1955: 181)の「第1図 能登半島アクセント分布図」をもとに鎌田が作成した。

<sup>3</sup> 上野(1985)に従い、本稿で類別体系を記述する際には、各類の音調型が対立している場合は斜線で区切り、合流している場合は中黒を用いてこれを示している。

<sup>4</sup> 本稿におけるアクセントの語類と各類の所属語彙については、金田一(1974: 62-73)を基本としている。そのため、3類(二十歳類)については本稿ではこれをひとまとまりの類としていない。

図 1. 能登半島のアクセント分布図<sup>5</sup>

上記のように、「能登主流アクセント」という用語は音調型を含めた体系を指すものと、類別体系を指すものとが存在していて誤解を招きやすい。そのため、本稿では便宜上、別の用語をあてることにする。上野 (1985) は、2 拍名詞の五つの類のうち、どれか一つが他の類と合流している「第二次アクセント」を、以下の五つに分類している。

- |       |           |             |
|-------|-----------|-------------|
| 「真鍋系」 | 1・5/2/3/4 | 真鍋式         |
| 「讃岐系」 | 1・3/2/4/5 | 讃岐式         |
| 「中央系」 | 1/2・3/4/5 | 中央式、加賀式、能登式 |

「真鍋系」や「讃岐系」などの「～系」の名称は、史的観点から同一の系譜を有するとみられるものについて与えられ、「真鍋式」などの「～式」の名称は同一の類別体系を有するものに対して共時論的に与えられる。この「系譜」に注目すると、第二次アクセントには三種類の類別体系が存在することがわかる。そして、そのうち中央系には中央式、加賀式、能登式の三つの共時態が存在するということである。金田一・芳賀 (1955) の言う「能登の主流アクセント」である「京阪式」とは、上記の「中央系」に言い換えられるものだと言えよう。上野 (1985) は能登に存在する中央式を能登中央式と呼んでおり、以下本稿でもこれに倣い、「能登主流アクセント」は「能登中央式アクセント」と呼ぶこととする。

<sup>5</sup> 「準東京式」では2拍5類が東京式と異なり、○○で発音される。

山口 (1964) の言うように、旧押水町や羽咋市、田鶴浜町、半浦などが能登中央式アクセントの地域であるとする、金田一・芳賀 (1955) が能登半島北部に指摘した「京阪式アクセント」の地域に広がるアクセントはどのようなものであるのか。これについて 3 節で考察する。

## 2.2. 音調型

能登中央式アクセントの具体的な音調型は新田 (2005: 37) が表 1<sup>6</sup>のように示している。表 1 のアクセントは、羽咋市、旧押水町 (現宝達志水町)、旧七尾市 (現七尾市) などのものである。なお、新田 (2005: 38) の指摘の通り、表 1 の a の系列は京阪式アクセントにおける高起平進式と、b の系列は京阪式アクセントにおける低起上昇式と、それぞれ起源をとみにしている。

表 1. 能登中央式アクセント

### a 系列

1-a0	蚊一	蚊一ガ	蚊一モ	蚊一カラ	蚊一マデ	コノ蚊一
1-a1	葉一	葉一ガ	葉一モ	葉一カラ	葉一マデ	コノ葉一
2-a0	タケ	タケガ	タケモ	タケカラ	タケマデ	コノタケ
2-a0'	ミズ	ミズガ	ミズモ	ミズカラ	ミズマデ	コノミズ
2-a2	カワ (川)	カワガ	カワモ	カワカラ	カワマデ	コノカワ
2-a1	カミ (紙)	カミガ	カミモ	カミカラ	カミマデ	コノカミ
3-a0	サカナ	サカナガ	サカナモ	サカナカラ	サカナマデ	コノサカナ
3-a0'	クルマ	クルマガ	クルマモ	クルマカラ	クルママデ	コノクルマ
3-a2	コムギ	コムギガ	コムギモ	コムギカラ	コムギマデ	コノコムギ
3-a1	ナミダ	ナミダガ	ナミダモ	ナミダカラ	ナミダマデ	コノナミダ

### b 系列

1-b0	木一	木一ガ	木一モ	木一カラ	木一マデ	コノ木一
2-b0	カサ	カサガ	カサモ	カサカラ	カサマデ	コノカサ
2-b2	アメ (雨)	アメガ	アメモ	アメカラ	アメマデ	コノアメ
3-b0	ウサギ	ウサギガ	ウサギモ	ウサギカラ	ウサギマデ	コノウサギ
3-b3	カブト	カブトガ	カブトモ	カブトカラ	カブトマデ	コノカブト

能登地域諸方言において、自立語は 2 拍以上の長さがなければならない (平子 2015: 21) 。そのため、表 1 に示した通り、能登中央式アクセントにおいて「蚊」や「葉」などの 1 拍名詞は、何拍の助詞を伴っても「蚊一」「葉一」のように長音を伴って発音される。

<sup>6</sup> 実線は高いところ、点線は少し高いところを示す。右下がりの斜線は、拍内での急激な下降を表す。なお、左端の数字とアルファベットは、「拍数-系列-語頭から数えた核が置かれる拍の位置 (上昇式の場合は単独発話において、上昇が見られる拍の位置)」を表す。したがって 1-a0 は 1 拍名詞の a 系列に属する語で、無核であることを意味している。

また、新田 (2005) は表 1 の a0 と a0' の音調の違いには次の (ア) と (イ) の音韻的条件が影響しているということも指摘している。

(ア) 第 2 拍目が有声子音 + 狭い母音 (i, u) をもつもの (3 拍以上の語は 3 拍目がさらに広い母音 a, e, o をもつもの)、または第 2 拍目が長音、撥音、母音イだけからなる拍のもの

(イ) 上記 (ア) 以外、すなわち第 2 拍目が無声子音であるか、有声子音 + 非狭母音であるもの、または第 2 拍目が長音、撥音、母音イだけからなる拍のうちいずれでもないもの

例えば、「水」は第 2 拍が有声子音 + 狭い母音 (i) を持っており、上記の (ア) に該当する。これは表 1 によればミズ、ミズガのように 1 拍目から文節末までが全て高く発音される。その一方で、「竹」の第 2 拍は、有声子音 + 狭い母音 (i, u) でも長音・撥音・母音イだけからなる拍のいずれでもない。こうした上記 (イ) に該当する語においては、タケ、タケガというように 1 拍目は低く発音されたのち 2 拍目以降が高く発音される。また、新田 (2005) では言及されていないが、「川」と「紙」、「小麦」と「涙」などの音調型を見る限り、a1 と a2 についても上記の条件が働いていると言えるだろう。

このように、能登中央式アクセントは二つの式を持つという点では京阪式アクセントと類似しているが、音韻的条件がアクセント型に影響を与える点では京阪式と異なっている。こうした相違点をふまえて、新田 (2005) は表 1 に見られる a の系列を「高進式」、b の系列を「低進式」として、京阪式の高起平進式・低起上昇式と区別している。

### 2.3. 句音調

表 1 の通り、名詞の前に「この」がつくと、2-a0 型と 2-a0' 型との区別が失われてしまう。これは 3-a0 型と 3-a0' 型についても同様である。「この」が名詞の直前についたとき、後続する語の頭が高く発音され、名詞が本来持っていた音調型が失われる。これは、東京方言などにも見られる句音調によるものと考えられる。ただ、音調型は句音調によって区別が消えてしまうことがあるのに対して、式の音調は単語に備わった特徴であり、「この」などをつけても消えることがない。そのため b 系列では、2-b2 型コノアメや 3-b3 型コノカブトに見られるように、高く発音される語末の拍の前までの拍が、「この」の 2 拍目の高さに完全に同化してしまうことはなく、これによって式の区別が保たれている。

### 3. 能都町方言のアクセント

旧能都町は、2005 年に柳田村・珠洲郡内浦町と合併して、現在は能登町の一部となっている。現穴水町の東に隣接する地域である。図 2 に合併前、図 3 に合併後の地図<sup>7</sup>を示す。なお能登町は能登半島中北部、奥能登・中能登・口能登のうち奥能登と呼ばれる地域に位置している。能

<sup>7</sup> 図 2・図 3 のいずれも [https://technocco.jp/n\\_map/0170ishikawa.html](https://technocco.jp/n_map/0170ishikawa.html) 参照 (最終閲覧日 2020 年 4 月 24 日)。なお、地図上の線と○や□の枠は鎌田が付した。

登町全体の人口は約 16,900 人 (2020 年 3 月現在) 、面積は約 273 km<sup>2</sup> (能都町のみでは約 115 km<sup>2</sup>) である。

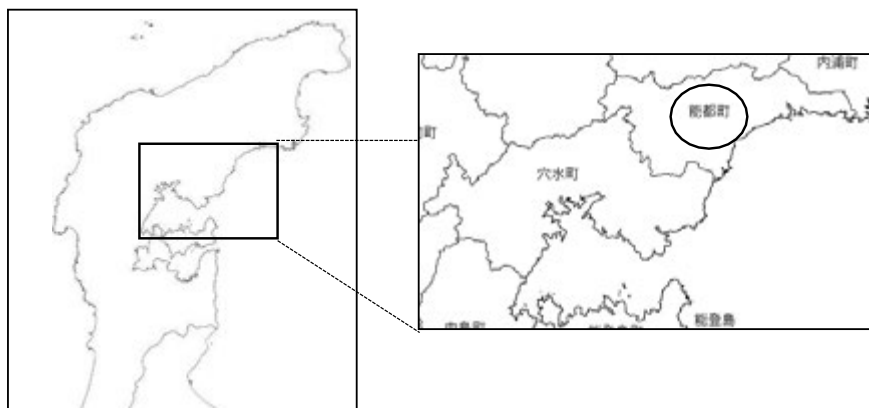


図 2. 旧能都町 (右拡大図の○印周辺)



図 3. 合併後の能登半島 (○印周辺が能登町)

旧能都町は、金田一・芳賀 (1955: 81) のアクセント分布図では「京阪式アクセント」の地域とされている (図 1 参照)。しかし、この「京阪式」とは前述の通り、能登中央式アクセントをも指す語であり、注意が必要である。なお、隣接する穴水町周辺は、金田一・芳賀 (1955) では曖昧アクセントの地域と分類されている。

### 3.1. 調査結果と分析

#### 3.1.1. 音調型

本稿のために行った聞き取り調査では、旧能都町出身で 1945 年生まれの女性にご協力いただいた。調査はインフォーマントによる調査票の読み上げにより進めた。調査回数は 2019 年～2020 年にかけての 3 回である。

まず、表 2<sup>8</sup>に 1~3 拍の名詞の音調型を示す。名詞の音調型は、新田 (2005) の表 1 と比較するために、単独形と、ガ・モ・カラ・マデを名詞の後ろにつけた形、そしてコノを名詞の前につけた形で記載する。

表 2. 旧能都町方言における 1~3 拍名詞のアクセント

a 系列

1-a0	蚊一	蚊ガ	蚊モ	蚊一カラ	蚊一マデ	コノ蚊
1-a1	葉一	葉ガ	葉モ	葉一カラ	葉一マデ	コノ葉
2-a0	タケ	タケガ	タケモ	タケカラ	タケマデ	コノタケ
2-a0'	ミズ	ミズガ	ミズモ	ミズカラ	ミズマデ	コノミズ
2-a1	カミ (紙)	カミガ	カミモ	カミカラ	カミマデ	コノカミ
2-a2	カワ (川)	カワガ	カワモ	カワカラ	カワマデ	コノカワ
3-a0	サカナ	サカナガ	サカナモ	サカナカラ	サカナマデ	コノサカナ
3-a0'	クルマ	クルマガ	クルマモ	クルマカラ	クルママデ	コノクルマ
3-a1	ナミダ	ナミダガ	ナミダモ	ナミダカラ	ナミダマデ	コノナミダ
3-a2	イノチ	イノチガ	イノチモ	イノチカラ	イノチマデ	コノイノチ

b 系列

1-b0	木一	木ガ	木モ	木一カラ	木一マデ	コノ木
2-b0	カサ	カサガ	カサモ	カサカラ	カサマデ	コノカサ
2-b2	アメ (雨)	アメガ	アメモ	アメカラ	アメマデ	コノアメ
3-b3	カブト	カブトガ	カブトモ	カブトカラ	カブトマデ	コノカブト

表 2 の通り、「蚊」「葉」などの 1 拍名詞の単独形は、能登中央式アクセントと同様に「蚊一」「葉一」のように長音を伴って 2 拍で発音される。ここから、能都町方言においては、1 拍名詞は単独発話などで、1 拍のままでは発音することができないものとわかる。しかし、「ガ」や「モ」など、1 拍の助詞を伴えば名詞末に長音をつける必要はない。これは全ての助詞の前で長音化していた能登中央式アクセントとは異なる規則である。2 拍でひとまとまりの単位 (フット) を成しているものと考えられる。

### 3.1.2. 能登中央式アクセントとの類似点・相違点

2 拍名詞では、語末の拍内下降が安定して出現することはなかった。語末に核が置かれる語の単独発話での拍内下降は、能登中央式アクセントだけでなく、京都方言のアクセントなどに

<sup>8</sup> 3-1-3. で詳述するが、新田 (2005) が指摘した音韻的条件は能都町方言でも働いている。そのため、能登中央式アクセントと同様に、京阪式アクセントの高起平進式・低起上昇式と区別して、a 系列・b 系列の語を表中でも用いている。型の名称を表す左端の英数字についても表 1 と同様に、「拍数-系列-語頭から数えた核が置かれる拍の位置 (上昇式の場合は単独発話において、上昇が見られる拍の位置)」を意味している。



も見られる。京都方言では、原則として語末に核を置くことが避けられる。例外的に核が置かれる「雨」「猿」「鍋」「春」などの2拍 L2 型<sup>9</sup>の語を単独発話する際には、語末の拍に急激な下降が現れる。ただし、こうした拍内下降を伴った発音は、京都方言の若い話者では減少の傾向にある (中井 2012: 112) ため、消滅しやすいものと考えられる。

また、2-a0 型と 2-a0' 型、3-a0 型と 3-a0' 型とをそれぞれ比較してみると、ガ・モ・マデ・カラなどの助詞をつけた際には保たれていた型の区別が、「この」を名詞の直前につけたときには失われてしまうことがわかる。ここから、能都町方言も能登中央式アクセントと同じように句音調をもっていると言える。

### 3.1.3. 式の対立

さらに表 2 からは、旧能都町方言のアクセントにおいては、アクセント核があるかどうか、あるとすればそれがどこにあるか、ということだけでは全ての音調型を区別することができないとわかる。例えば、2-a0 型「竹」と 2-b0 型「笠」を比較してみると、表 2 からこの両者はいずれも無核で実現することがわかる。しかし、「竹」は低く始まって2拍目以降が上昇しているのに対し、「笠」では低く始まりその低さが文節末まで維持されたままとなっている。したがって、能登中央式アクセントと同様に旧能都町のアクセントにも式の対立があると指摘できる。

a 系列と b 系列の違いを見てみると、a 系列の京阪式アクセントの高起平進式と同源の語では、比較的高く始まってゆるやかにピッチが下がっていくような発音となっている。その一方で、低起上昇式と同源の b 系列の語では、低く始まり、語末にかけてだんだんとピッチが上昇していくような型となっている。このことから、対立する二式の種類は、京都方言のアクセントなどと同様に平進式と上昇式の二つであるということになる。式の対立と下げ核によって音調型を区別する方言と言える。

### 3.1.4. 音韻的条件

二式の対立をもつことに加えて、能登中央式アクセントと同様に、能都町方言にも前述の(ア)と(イ)の音韻的条件が影響している。例えば、2拍の2類名詞「川」や3類「山」などのように(イ)の条件に当てはまる語は、語末に核が置かれる。2類「石」や3類「月」のように、2拍目の母音が狭母音であっても、子音が無声の場合はイシガ、ツキガのように名詞の末尾にアクセントが置かれる。このことから、子音の有声性と母音の狭広の両者が音韻的条件として働いていることがわかる。

2-a1 と 2-a2 の二つの型については、アクセント核は一般に右にずれていく傾向があることや、能登中央式アクセントでは a 系列に属する語は高く始まっていることから、ヒジガなどのように1拍目が高く実現する 2-a1 の音調型がアクセントの弁別に働く型であり、そこに音韻的条件が働いて 2-a2 のような型が生まれたものと考えられる。

<sup>9</sup> 本稿で式について記号を用いて述べる場合、L は上昇式 (低起式) を意味し、その後ろの数字で、核の有無と語頭から数えた核の位置を表す。したがって L2 型は上昇式有核、核の位置が語頭から2拍目であるような型を表す。また、H は平進式 (高起式) を意味する。



山口 (1964) はさらに、能都町において、2 拍 1・2・3 類では無声子音に狭母音がついた拍をもつ語もそれ以外の語とは異なる型をとるという現象を指摘している。つまり、(ア) と (イ) に加え、(ウ) 無声子音＋狭母音 (i, u) という条件によって、この (ウ) に当てはまる「牛」「柿」「町」「梨」「足」「靴」などの語は、 $\overline{\text{○○}} \sim \overline{\text{○○}} \nabla$  と発音されるという。山口はこの現象が、能都町の他、旧珠洲市飯田町地区や旧珠洲郡内浦町などにおいても見られるとしている。しかし、今回の調査ではそのような現象は発見できなかった。(ア) と (イ) を残して (ウ) のみが消滅するとは考えにくい。隣の穴水町においても、(ウ) のような条件は働いていないことから、能都町の中でも穴水町寄りの西部地域では当時から (ウ) が働いていなかった可能性がある。より広い範囲で調査を行い、(ウ) の条件が残る地域があるかどうか探していく必要があると言える。

### 3.2. 類別体系と歴史的な考察

旧能都町方言における 1～2 拍名詞のアクセントの類別体系をまとめると表 3 のようになる。

表 3. 旧能都町方言の 1～2 拍名詞アクセントの類別体系

1 拍 1/2/3

2 拍 1/2・3/4/5

この類別体系を、音調型とともにまとめると表 4 のようになる。なお、表中の○と▽はそれぞれで 1 拍を表しており、▽は助詞であることを意味する。音調型の下の ( ) 内には語例を示した。

表 4. 1 拍名詞の類別体系と音調型

類	1	2	3
音調型 (語例)	$\overline{1-a0}$ ○○ (蚊)	$\overline{1-a1}$ ○○ (葉)	$\overline{1-b0}$ ○○ (木)

表 5. 2 拍名詞の類別体系と音調型

類	1		2・3		4	5
音韻条件	(ア)	(イ)	(ア)	(イ)		
音調型 (語例)	$\overline{2-a0'}$ ○○ (水, 塵)	$\overline{2-a0}$ ○○ ( 𪛗 ) (竹, 姉)	$\overline{2-a1}$ ○○ (紙, 犬)	$\overline{2-a2}$ ○○ (▽) (川, 馬)	$\overline{2-b0}$ ○○ (糸, 笠)	$\overline{2-b2}$ ○○ (雨, 鍋)

1・2 拍名詞の類の統合の状況は、能登中央式アクセントと同じである。前述の通り、山口

(1964) が指摘するような、無声子音+狭母音が音韻的条件となるような現象も見られない。ここから、能登中央式は能登半島北部の地域でも見られるということが指摘できる。

ただ、能都町の **b** 系列については、能登中央式とは異なる点が多い。1 拍名詞においては上昇の現れ方が後続する助詞によって揺れており、**a** 系列の 1-a1 型  $\overline{\bigtriangledown}$  との合流へ近づいているようである。京阪式から東京式に変化した (金田一: 1954 [1975]) とされる能登島において、1 拍名詞は  $1 \cdot 2/3$  という類別体系で  $\overline{\bigtriangledown} / \overline{\bigtriangledown}$  という対立になっているが、能都町ではこれと同じ音調型の対立でも、 $1/2 \cdot 3$  という合流となる可能性が指摘できる。金田一は能登半島の諸方言が東京式に向かう中間段階にあるとしているが、合流の進む先は能登島と同じではない可能性があるということになる。

2-b2 型についても七尾市諸地域と能都町方言とでは異なる部分がある。例えば、2 拍 5 類「雨」のガ形は、能都町ではアメガと発音されるが、表 1 ではアメガとなっている。また、同じく 5 類「鍋」については、能都町ではナベガ、ナベモのようにモ形でも  $\overline{\bigtriangledown}$  と発音される。2・3 類 (イ) の  $\overline{\bigtriangledown}$  と同じ音調型になりかけているということである。金田一は 2・3 類のガ形などで  $\overline{\bigtriangledown} > \overline{\bigtriangledown}$  という変化が起きるより先に、5 類で  $\overline{\bigtriangledown}$  から山の交替が起り、 $\overline{\bigtriangledown}$  という音調型になったと考えている。 $\overline{\bigtriangledown} > \overline{\bigtriangledown}$  という金田一の説に従えば、アメガやナベガなどといった能都町の音調型は古い姿の名残であり、七尾市などではここから山の後退によってアメガという新しい音調型を獲得したということになる。ただ、能都町の  $\overline{\bigtriangledown}$  という音調型は安定しており、今後山の後退が起きると考えられる根拠は現在のところ存在しない。むしろ、2・3 類 (イ) とともに同じ方向へ変化し、 $\overline{\bigtriangledown}$  という音調型を経ない可能性がある。

いずれにしても、1~2 拍の **b** 系列の名詞における音調型を見る限り、能都町は式の対立を失う段階に入ろうとしているのではないか。特に、1 拍名詞では全体的に **a** 系列と合流しつつあり、2 拍においては 5 類から合流が進んでいるようである。金田一 (1975: 189) は、七尾市などは一応安定の相をなしており、京阪式から東京式へという能登島の変化に歩みをそろえる可能性は低いとみているが、実際は緩やかに式の対立を失いつつあり、核の位置による対立を残すのみという形になる可能性すら出てきていると考える。

#### 4. まとめ

これまでの調査で、旧能都町と「能登主流アクセント」とされている地域との比較を行い、両アクセントとも対立する式をもち、同様の音韻的条件が共通した類に働いているなどといった共通点が見られることが確認できた。しかし同時に、特に **b** 系列について、類別体系が同じだが音調型がわずかに異なるというような様々なバリエーションが生まれている可能性も指摘できた。こうした地域のアクセントを調べていくことで、アクセント体系が変化していく過程を捉え、さらに能登半島で「曖昧アクセント」とされている地域の音調型や体系をより明確に記述し、通時的な考察を行うことにも役立つものと考ええる。

また、能都町に接している穴水町の中の集落には、式の対立をもたず、2 拍第 4・5 類が頭高

型で発音されるなど、能登中央式アクセントとは大きく異なる体系をもつと見られるものが存在する。穴水町あるいは能登町のどのあたりに、曖昧アクセントと能登中央式アクセントとの境界線があるのか、多地点調査を展開して調べていきたい。

#### 参考文献

- 上野善道 (1985) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (1)」『日本学士院紀要』40(3):61-84.
- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (2)」『日本学士院紀要』41(1):15-70.
- 金田一春彦・芳賀綏 (1955) 「5. アクセントから見た能登—その分布と変化—」九学会連合能登調査委員会編『能登: 自然・文化・社会』181-189. 東京: 平凡社.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』東京: 塙書房.
- 金田一春彦 (1975) 「東西両アクセントの違いができるまで」『日本の方言: アクセントの変遷とその実相』49-81. 東京: 教育出版.
- 新田哲夫 (2005) 「アクセント論——能登島の「式」の変化を考える」『國文學: 解釈と教材の研究』50(5):34-43.
- 平子達也 (2015) 「能登島諸方言におけるアクセントの変化—「語頭隆起」とその後—」『日本語の研究』11(1):18-35.
- 平山輝男 (1940) 『全日本アクセントの諸相』育英書院.
- 松森晶子・木部暢子・中井幸比古・新田哲夫(編著) (2012) 『日本語アクセント入門』三省堂.
- 山口幸洋 (1964) 「能登のアクセント」『国語学』56: 35-48.

# The Nominal Accent of the Former Noto Town Dialect

Nene KAMATA

nene1184832.kmt@gmail.com

**Keywords:** the Noto Peninsula, Noto town dialect, Kyoto-style accent, Noto central type, nominal accent

## Abstract

The dialect of Noto Town in the former Hosu County, Ishikawa Prefecture, has been said to have a variety of the Noto Central accent, which is found in places such as Tokuda, the former Nanao City. In this paper, the author reports the accentual patterns of 1- to 3-mora nouns of the Noto Town dialect. The author shows that the Noto Town dialect has a system similar to the Noto Central accent with no essential difference. However, the rising pitch patterns are changing in Noto Town, and the dialect is in the process of losing the contrast of pitch patterns. The results also suggest that a sequential merger of pitch patterns is starting from 1-mora nouns.

(かまた・ねね 東京大学大学院)